

供たちの多くっていうか、今のいじめというのは、いじめられる人間がくるくると変わっていきます。ですので、いじめに加担していなかったり、それからいじめをとめようとする、自分がいじめられるのではないかというふうな意識を持って周りにいる子が非常に多いと、だからいじめがとまらないということになっています。ですから、こういったいじめを助長している子や、**それからいじめにかかわろうとしない子たち**に、いじめを助長している子に対しては、それもいじめているのと同じなんだということを伝え、教えたり、それからいじめから避けている何もしない子、そういった子は、さらにその周りにいる、やめろよというふうにいじめをとめたり、それから先生を呼びに行こうというふうな周りに知らせると、そういった子供たちになってほしいなあということで、こんな絵を見せたり、この個々の子供たちの気持ちを考えさせたりする中で、いじめということを自分たちの力でどうにか解決していこうという気持ちを持たせる学級づくりというのをしているところ です。

それから、これは保護者向けのパンフレットとして作ったんですが、その下のいじめている子供のことを知ってくださいというところのさらに左下の方に、もしいじめられていることがわかったらというふうに書いてあるものです。いじめを知ったら、まず全力でいじめられている子を守ることをその子にしっかりと伝えて、それからいじめられていることがわかったら、そこにあるように、本人の苦しみや恐怖感をわかろうとすることが大切だと、それから子供の話を聞いて気持ちを認めるっていうふうな、こういった気持ちを周りの人が持っていじめられている子に接しましょうというふうに言っています。これを改めて今日来るときに読んでみると、このことについては犯罪被害者の方々の支援に接するときのことにも大きくかかわっているのかなあというふうな気もしています。

最後、私の話の最後になるんですけども、今のこの後半のねらいが、**犯罪のないまちづくり**ということなんですけども、**今いじめについては、インターネットとか携帯電話でのいじめっていうのが非常に問題になっている**、これ

は外から見えません。メールで直接おまえ死ねとか、うざいとかというふう
に送られるもので、学校の友達の目の前、あるいは担任の目の前で行われて
いるのではないので見つかりにくいという、非常に発見が難しいいじめが最
近出てきています。このことをどうにかしていかなければいけないなあとい
うことで、学校の方ではモラルやルール、そういったものを教えているんで
すけども、一つには子供の携帯電話に規制をかけるなどのやはり企業の努力
というものも必要かと思えますし、それからこういったものについては、保
護者の方、地域の方というよりか保護者の方になるんですけども、強い意志
を持って、携帯電話を買い与えるときに、その使用についてのルールやマナー、
やはりルール、規則、そういったものをしっかりと家で作るということが
重要ななあと思っています。野方図に、何でもいいからどうやって使っても
いいよといって買い与えるんじゃないかと、やはり買い与えるときにしっかり
家庭でルールをつくるのが大事ななあというふうに思っています。今この、
ちょっと話の趣旨が変わってきていますけども、携帯電話のいじめというこ
とが大きな問題として教育委員会では取り上げているということです。

○コーディネーター（川崎政宏）

どうもありがとうございました。

このリーフレットを見ながら、犯罪被害者支援とも非常に密接な問題だと
いうふうに平賀さんの方が感じられたところは、多分根っこの部分で共通し
ている部分があるんじゃないかというふうに思います。**子供たちが被害者にな
ってもいけないし、加害者にもなってはいけないという思いを共有してい
けたらなあと思います。**

佐々木さんの方からもそのあたりを踏まえて、地域の中で子供たちや保護
者の方とかかわられる中で、市民活動の観点から少しお話しいただけますで
しょうか。

○シンポジスト（佐々木裕子）

まず、今のテーマに入る前に、先ほどのあの請願の結果のことをちょっと

触れさせていただきたいんですが、このフォーラムの前に、打ち合わせを市原さんたちと行ったときに、津山市は請願を受けて国に対して意見書をずっと上げていたので、ほかの自治体のことを全然知らなかったんですけども、市原さんたちが回られたときに、ほかの自治体では請願を受け取ってもらえなかった。で、岡山県が、県議会が2回目にやっと意見書を上げてくれただけで、岡山県下では津山市と県だけだったんですっていうことを聞いて、それだけこの犯罪被害者の問題ってというのが理解されない、なかなか理解しにくい問題だったんだなあということを感じています。

しかし、今回のこういうフォーラムが行われたことで、皆さんの耳にそういうことが届くことによって、犯罪被害者の置かれている今の状況が理解いただけることによって、少しずつ今まで社会の中のタブーのような形で、みんなが聞いてはいけないというようなことがあったと思うんですけども、そういう声皆さんのところに届くことで、これから少年犯罪被害の皆さんに対する偏見とか特別視が薄らいでいくのかなあというふうに、そうなることを期待し、また確信しているところです。

今、私にいただきましたテーマの中に子供たちの問題がありますが、私はもともと教育関係の仕事をしていたこともありまして、子供の育ちについては非常に興味を持ってというか、関心を持って今も活動をしていますけれども、そうした中で、今少年犯罪の加害者の記事の中に、少年が発達障害児であった、というような記事が目に見えることが多いと思います。この発達障害児というのも私の課題として今取り組んでいるところなんですけれども、まだまだ情報不足、知られていない中で、知的なレベルは高いんですけども、人とのつき合いが悪い中からいじめられたり、いじめる側に入ってしまったらということ、学校の中で、幼稚園の中で、トラブルを起こしたりする場面が多いわけです。そういう子たちが近所にいるということ、また新聞の記事を読んだりした方から、あの子はどうもそうらしいけれども大丈夫かといって、そういう障害のある子供たちが偏見で地域から見られているようなこともあって、障害児を抱える親御さんからそんな声が聞かれます。

また、今健診が非常に進んでいて、3歳児の健診で指摘されることが多くて、親御さんの方がかえって神経質になってしまって、我が子が本当にこうなったらどうなんだろうとかということ、発達障害に対する親の不安、子育てに対する不安みたいなのが広まっているような気がします。

また、発達障害の子供たちっていうのが統計上年々今増えていまして、文部科学省の調査でも1年間に生まれてくる子供たちの6.1%と言われているぐらい多いんですけれども、それよりも多いという説もあるんですけれども、今社会の中で、そうした子供たちをどう育てていくかっていうのが大きな課題だと思います。

原因が特定できないんですけれども、環境であるとか化学物質であるとか、食べ物の中の添加物さえも、胎児のとき、または子供のときに脳に与える影響が何かあったんじゃないかということ言われているんですけれども、そういった中で胎児、乳幼児、小学校、中学校と一人の子供が大人になっていく過程を、今行政というのは縦割りなんですけれども、情報をうまく伝えてやることで子供をうまくサポートして一人の大人に育てていかなければいけないんじゃないかなってことを感じています。ほかの自治体の取り組みですと、本当でしたら健康福祉部に属する乳幼児のカルテを学校教育にそのまま移行することで、療育をうまく小学校につなげていくような活動をしている自治体も随分増えているんですけれども、子供たちをこれから育てていくってことは、社会にとっても自治体の現場にとってもとても大きな課題だというふうに感じていますし、一方で今食育という問題が出ていますけれども、キレる子供の食の問題とか、それから生活の乱れと食の問題というのも出てきていますけれども、特に妊婦の食べた物は子供の脳に直接影響していきますし、妊婦はきちんと食生活が、今の家庭の中で3世代とつながった家庭の中で育った人が親になっていくんだったらいいんですけれども、なかなか食が乱れた中で親になっていくところもあって、私は命の問題と食の問題っていうのは何か一見違うことのようなんですけれども、非常にかかわった問題としてこれからつなげて考えていかなければいけないんじゃないかな

あとということを感じています。ちょっと、今日の犯罪被害というところとか
け離れたような感じもするんですけれども、療育にかかわる臨床心理士の方は、
犯罪の被害者にも加害者にも子供をしてはいけない、そのために今乳幼児期から、
幼児期から学校にかけての療育、それから教育の連携というのが非常に大切である
ということをおっしゃっていますし、保護者もそういう中で戸惑っている方たちもいる
ということを知っていただきたいと思います。

そうした取り組みの中で、行政の中でもいろいろできることがあると思う
んですけれども、今回このシンポジウムにかかわるまでは、非常に**命を大切に
される地域づくり**、しかも犯罪被害者のファミリーサポートの取り組みと
いうことで、**重い課題**だなあというふうに思っていたんですが、実は今回い
ろいろ打ち合わせをしてみまして、**命を真ん中に置いた取り組み**であるとい
うことから、家庭でも、それから地域でも、各自自治体の中でもやれることは
いろいろありそうだなあということを感じています。そしてまた、この活動が
市民活動であるという認識も私はこのたびあらためて知ったんですけれども、
**市民活動というのは、行政だけで行っていた地域づくりに住民の声を届けて、
住民と、それから行政が一緒になって地域をつくっていくこと**なんです
けれども、今日のこのシンポジウムも、美作県民局と、それからNPOの
取り組みです。近くの学校現場に行って市原さんのようにお話をしてくださ
るのは民間の方ですよ。ですから、これからの**地域づくりのキーワードと
しては、行政がいかに民間の方たちと一緒にこの地域をつくっていくか**
というのが一つの課題になってくるのではないかなと思います。行政だけが
つくっていた地域づくりが1としたら、そこに住民が加わって1足す1が2に
なるかと思うと、協働というのは2が2で終わらずに2.5になったり3に
なったりいろいろ広がっていく活動が出てきますので、これからこういう形
の中で地域がつくられていったら、暮らしやすい地域ができていくんじゃない
かなあと思っています。

また、今回勇気を持って今ここでこういうふうに話をしていますと高橋先生も
おっしゃってくださったんですけれども、こういう人たちは本当ここが

困っているんだ、ここはこうしてほしいんだっていうふうに今日は意思表示をしてくださいましたけれども、さっき行政の方の、その行政の中の矛盾も、先生最初に言われましたけれども、こんなことはちょっと工夫をしたらすぐにでも何か解決できそうなところがありますよね。私たち市民活動をしているときにいつも思う、思うというか市民活動のミッションと言うんですけれども、やっぱり思っていること、感じていることを行政の中、社会の中で形にしていくことが私たちの市民活動の目的なので、今日ここに参加していただいている皆さんがそれぞれのポジションの中で何ができるかを、もしかしたら行政の仕組みの中で変えていかなければいけないこともあるかもしれないんですけれども、取り組みが広がっていったらいいなあと思っています。

地域の中に帰って、今日私もお話を聞いた中で、こういう話があったよっていうことを一人でも多くの方に伝えていくことも、できる小さな取り組みだと思いますので、そうしたことができるのが今日のシンポジウムの成果なのかなあと思って、**本当にできることから、小さなことからまず具体的な一歩を進めていきたい**と感じています。

○コーディネーター(川崎政宏)

佐々木さんありがとうございました。

シンポジウムのテーマのところに触れていただいて、犯罪被害者支援というどうしても重い課題というふうに思われがちなんですが、今佐々木さんのお話の中にもありましたように、**命という言葉を真ん中に、中心に据えて、家庭とか地域で身近なところから、それこそ民間と行政とで一緒に形をつくっていくというまちづくりの発想**がとても気づきとしてわかりやすい部分ではなかったかというふうに思います。命を真ん中に据えて考えていくと見えてくるものっていうのがいろいろあるのではないかというふうに思います。

先ほど発達障害の問題も佐々木さんからお話がありましたけれど、非常に偏見にさらされる部分があって、子供たちが被害者にもなってはいけないし、加害者にもなってはいけないということで、いろいろな場面で暴力の被害、それから学校でのいじめの問題、そういったこととも連なってくるような問

題なのではないかなというふうに感じます。

それでは、学校教育での取り組みについては今少しお話をいただいたので、命の問題を真ん中に据えて話をしていく中で、高橋さんが先ほど、前半の部で少し触れておられた、今自殺の遺族の方とか、それから突然死の遺族の方たちも同じように地域の中で孤立していて、やはり命と向かい合う、あるいは語る場がないという、そういったことに対して、つながり合いの場、分かち合いの場を持つ取り組みを始めています。このことについて、命の問題を中心に据えてというところから少し高橋さんのお話をいただけますでしょうか。

○シンポジスト（高橋幸夫）

犯罪被害という形で僕もファミリーズ、こういう形、犯罪被害者支援、僕、支援してもらう方なんだけど支援する方になっちゃって、支援をする方もされる方も僕同じだなというふうに思っています。どういう点で同じかという、川崎先生が言われたように、命、命のところへ行き着いちゃうんですね。命が大切だ、自分の大切な人が亡くなったっていう命がなくなったということです。自分の大切な子供が亡くなって、子供の命がなくなった、子供がちゃんと成長してくれないということは、やっぱり母親、命を育てていこうとする、それがもう育たない。そこに悲しみが出てくる。あるいは、ご主人が自殺して亡くなる、そういう何かどこから切り口で行っても、最終的には命というところにぽんち行っちゃうんですね。僕は、非常に自分自身の悲しみだったんですけども、ファミリーズという形で話して行くと、その一方で、行き着くのは**グリーフワーク、喪の作業**と言いますが、悲しみ、別れ、悲しみ、そういうふうなものをいかに遺族がこう、一生悲しみながら生きていかざるを得ないですが、でも一生悲しむのは本当にとってもつらい。そこで、自死遺族というような方はやっぱり同じ。大切な人を亡くして、それ亡くしたのは形は違うんです。僕は他人からうちの妻の命をとられたんですが、自死の方は自分で命を絶ったわけですけど、残った家族は

大切な命をなくしているわけで、その悲しみは同じなんですよね。これを、その**残った家族がどう自分の残りの人生を生きていくか、これ一緒に考える**という、同じ形で同じスタンスになってしまうし、僕がその話をこう話して、高橋先生は、犯罪だからもっとつらいわねえとか言われるんですけど、もうそれ比較できない問題です、その点。自死で亡くしたそのご家族というのは、大切な命をなくして悲しいんです。僕は人から奪われて悲しんでいるわけですが、悲しみは同じなんで、その**命に軽重はないわけで、悲しみにも僕はそう軽重はないと思うんです**、入り口が違うだけであって。そう考えると、これ僕悲しんでいる人とともに、一緒にどうやったらこの悲しみが少なくて、どういうふうにしたら僕ら残された者は少しでも元気、幸せはないですが、楽に、楽に、楽でもないんですが、悲しみが少しでも少なく過ぎていけるかなって、そういうお手伝いが僕に少しできるかな、そういう思いで今も倉敷で、三、四人ですかね、が集まって、たまに僕も入って、それからファミリーズの皆さんも入って四、五人になっていますが、話ししていると、むしろ命のその悲しみということ、亡くするということの本当につらいそのつらさ、泉のごとくわき出てくる、そのわき出てくるその泉をどうしようで持て余しているんですが、それを持て余してる、でもそれをお互いに共有し合って、ああそうだろう、うちもそうだよな、ああ、あなたもそうなのっていうことをわかり合う、わかり合ってもらった、僕だけではないんだという共有したら、そこに何かちょっとしたこう安らぎではないんですが、ああ僕だけじゃないんだっていうことがあるんですね。だから、そうやって僕は、僕たちは自死遺族のところまで、犯罪被害者の方たちが自死のところまでつながっていったら、ずるずるずると意図したんじゃなくなって、自然とそういうふうになっていったら、やっぱりこれ命です、命が中心になったから。そうしますと、自死の家族も犯罪被害者の家族も同じになる。

だから、佐々木さんもおっしゃられた広汎性発達障害の方の差別、広汎性発達障害というのは、何かこういうふうな名前がぼっとつけば、その方は何かというたら何か常習だから、何か差別してしまう、ところが決して広汎性

発達障害の人が犯罪が多いとか僕は決して思っていない、何か世間がレッテルを張ってしまっているんですね。精神科へ入院したら、何か彼精神科へ入院しとったからああいう犯罪を犯したなんてレッテルを張りつける、精神科へ入っていない普通の人のほうがたくさん犯罪を犯しているんですよ、現実にはですね。なのに、何かしら精神科、精神病院へ入ったら、あいつ精神病院へ前入っとたんだと、だからやったんだと、こういうふうな偏見を世間がレッテルを張ってしまってる。

ちょっと話がそれましたけれども、何か偏見と、その中で、差別を受けた者のこの苦しみ。また、大切な人を失った人の悩みというものが、それだけじゃなくって社会との偏見の中でまた闘っていかなくちゃならない、何か二重の苦しみに遭ってる、これは僕にとっては、すごく乗り越えても乗り越えても乗り越えられない。今日、こういうふうに皆さんにお伝えしたいのは、とにかく偏見、偏見を持つ、偏見を持つなど言うても持つ、わいてくるものは仕方ないんですが、わかってほしい、相手を理解してほしい、そういう気持ちだけは持っていただきたい。そしたら、自分も相手の立場に立って、あの人の立場に立って、もし自分がそうだったら自分はどう思うだろう、このやりとりをしていただいたら、いじめということはできないと思うんですね。いじめられる側に立って、もし自分がいじめられたら、自分はどうなってる、決して喜ばない、うれしいと思わないですね。じゃあ、自分はいじめてはいけないという、こういうやりとりを自分の中でしていただきたい。だから、**相手の立場に立って物を考える**ということを僕はしていただきたい。そうすれば、そんな犯罪だとか差別だとか、いろいろなことも、なくなると思います。**相手をわかってほしい、お互いに分かち合う**ということを僕はしていただきたいなあと。まずそのところが今の社会ではないんじゃないかと、何か自己中心的で相手のことを考えずに一方的に、自分のことだけしか考えてない。だから、いじめも起こっちゃう。いじめられる側に立ったら僕はできないと思うんですよ、もし自分がいじめられたら。そういうふうなやりとりが、これは僕はコンピューター社会が作りだしたのかなあと思ったりもする